

真道洋子さんを偲ぶ

長谷川 奏

Obituary for Dr. Yoko Shindo (1960–2018)

So HASEGAWA

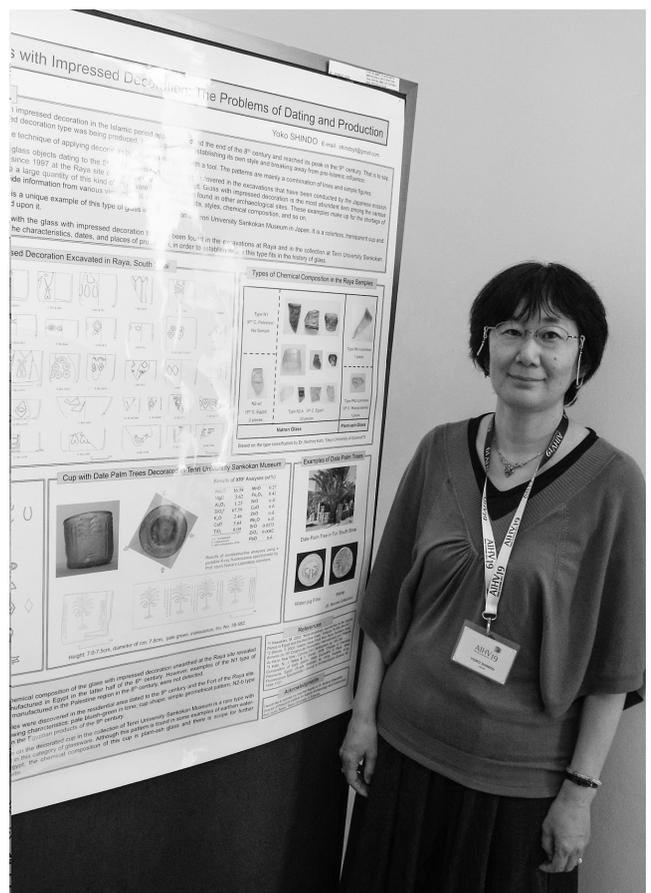
2018年9月13日、イスラーム考古学者でありガラス史研究者の真道洋子さんが逝去された（享年57歳）。イスタンブールで開催されていた国際学会に出席中、市内の電車事故に巻き込まれたものだった。2018年の1月には、真道さんが師とも慕う川床睦夫氏が逝去されたばかりなので、この1年は、日本のイスラーム考古学はたいへん大きな痛手を背負う年になった。真道さんのまわりには、イスラーム美術史や建築史、さらには出土遺物の整理を共にする多くの友人たちがおられるので、私が追悼文を書くことは必ずしも適切では無いが、ここでは草創期の時代、川床氏のあふれんばかりのエネルギーのもとで、真道さんとは同じ空気を共有したクラスメートの思い出として記させて頂きたいと思う。

真道さんは、早稲田大学の人文学科を卒業され、その後考古学科の大学院に進まれた。おりしも、カイロ大学アフリカ研究所に留学されていた川床睦夫氏が帰国後に出光美術館に就職され、早稲田大学文学部考古学専攻の櫻井清彦教授を旗頭にして、エジプトのフスタート（al-Fustāt）遺跡の考古学調査を始められた時期であった。フスタート遺跡は1920年代にエジプトの考古学者であったアリー・バフガト（Ali Bahgat）が広域の調査を行い、多くの遺物がイスラーム美術館に所蔵されていたが、その後は在地の研究者が細々と調査をするのみで研究が停滞していた。それが1970年代末から80年代を迎え、アメリカやフランスの研究所が本格的な調査を始めていた。川床氏が選んだ調査地区は、歴史的にも最も重要な地区であるアムルモスクのすぐ東側に位置しており、これが記念すべき日本のイスラーム考古学の出発点となった。

フスタートは、下層には初期イスラーム時代の遺物や遺構が埋もれているが、十字軍の侵攻に伴い火をかけて焼き尽くされたといわれる時代や、ベストの流行によって壊滅的な打撃を受けた中世の時代を経て遺跡は廃墟となり、以後カイロの廃棄物がうず高く堆積していった経緯があり、層位の断面には、土器・イスラーム陶器・中国陶磁・ガラス器・装身具・道具・建材などがぎっしりと姿をみせている。真道さんは、その卓越したデータ整理能力を川床氏から見込まれ、フスタート遺跡の遺物整理を担当するようになる。テントや倉庫の中での整理作業とは言え、早朝から

夕方まで続く発掘調査の中で、また宿舎に戻った後でもミーティング、食事、宴席と続く毎日の中では大変な苦勞の連続であったと察せられるが、莫大な遺物の整理作業は、この後の真道さんの研究の骨格を形作ったものと推測される。

真道さんの最初期の代表的作品は、フスタート出土の無銀化の精製濃緑ガラス器を主題とする論考である。初期イスラーム時代の緑ガラスは、低マグネシウム・低カリウムというローマンガラスの伝統を特徴付けるものであり、そこから抜け出した時に、ラスター彩ガラス等の新しい技術や、細工がし易い・液体を通さない・透明であるというイスラーム独自の好みが見られ、前身文化の中から選択されていくという論点は、イスラーム陶器等の生活雑器や建築遺構にま



国際ガラス学会での真道洋子さん

で通じる物質文化論となった。やがて1400頁にわたるフスタート遺跡の報告書作成という大仕事を経た成果は、後に真道さんが中近東文化センターに奉職後にまとめられた、同館および出光美術館所蔵のガラス製品の総合カタログの刊行(『イスラームのガラス』)へと繋がっていく。

フスタート調査以後に川床氏が手掛けたフィールドは、エジプトでは、シナイ半島のトゥール(al-Tūr)遺跡(1986年～)とラーヤ(Raya)遺跡(1997年～)があり、スーダン・サウジアラビア・イエメン・オマーンといったエジプトの周辺地域にも広がっていった。海外調査ばかりでなく、中近東文化センターでは、歴史学・人類学・宗教学等を総合した研究会やナイル・紅海地域に特化した研究会等が盛んに行われたが、真道さんは川床氏が進める現地調査をフォローしつつ、人的な交流を深めて、自身の研究ネットワークも大いに広げていかれた。そうした蓄積を活かしつつも、また真道さんが東大の榎屋さんと共同で始められた「コプト・イスラーム物質文化研究会」は、2014年の爆弾テロ事件を機縁に、古代エジプト以外の物質文化の存在を知らせることをめざす新たな試みとしても展開していった。

真道さんは、中世の歴史文書に登場するユダヤ教徒やシリア系キリスト教徒のガラス職人の記述から、イスラームガラスを取り巻く世界はイスラームという枠を超えた人々

の営みを写し出す鏡として位置づけた(『イスラームの美術工芸』世界史リブレット)。またシーラーフ系商人の足跡を辿っていくと、中東からアジア(ベトナムから中国までを含む)にわたる広範な海上・陸上交易の道筋が見えてくる、という視点は、イスラームガラスの東漸研究の核となった。真道さんが近年精力的に進められていたウズベキスタンでの研究活動は、そうした視野の延長とも思われ、一方、歴史・美術史系の研究者ともチームを組んで取り組みつつあったスペインへのまなざしは、新たな西漸研究の始まりでもあった。

2016年に横浜ユーラシア文化館で日本調査隊の足跡を伝える展示会の準備を精力的にこなされている姿は、まさに真道さんの研究のねもとにフスタート研究があることを印象づけるものであった。さらに、チュニジアのケルクアン(Kerkuane)というフェニキアの都市遺構を訪れた際の真っ青な地中海の感動を話されていた姿も記憶に新しい。ここは、前1千年紀の後半から、コア・ガラスの伝統が連綿と続いてきた地である。蛍光X線を用いて素材の科学分析という研究ツールを研鑽されていた真道さんの中では、古代から中世にわたって、洋の東西にモザイク状にちらばる文化像を取り結ぶ道筋ができていたとも思われ、それだけにこのたびの早いご逝去は心より惜しまれる。ここに謹んでご冥福をお祈りする次第である。

長谷川 奏

So HASEGAWA

早稲田大学総合研究機構

Comprehensive Research Organization,

Waseda University